

Brighter Future of Agribusiness



MIKAKO
Hayashi

HISAKO
Nakamura

RINA
Akimoto

MISA
Nakamura

女性経営者たちが語る 農業ビジネスの現実と未来

高級品の輸出の伸びや若い就農者の増加など、明るい兆しも見えてきた日本の農業。

だが、少子・高齢化による国内市場の頭打ちや人手不足、

輸入品との競争激化といった構造的問題が解決したわけではない。

そんななか、農業ビジネスに、さまざまな形で乗り出した女性たちが元気だ。

そうした女性経営者を迎え、林美香子慶應義塾大学大学院特任教授をファシリテーターとして、

日本の農業の現実、そして未来を語ってもらった。

こうして私たちは 農業ビジネスを始めた

林 今日は農業や農業関連ビジネスを経営されている女性の方にお話をうかがえるということで、本当に楽しみにしてきました。私自身は大学で農と食による地域活性化といったテーマについて教鞭を執っているのですが、皆さんはまさに、そうした活動に経営者として取り組んでいらっしゃる方々ですものね。

秋元 私はピビッドガーデンという会社を2年前に東京で立ち上げて「食べチョク」という、こだわりを持って栽培されている全国の農家さんと、消費者や飲食店、小売店などをオンラインで直接つなげるサービスを手がけています。

林 食べチョクのロゴが入ったTシャツをいつも着ていらっしゃるということで、今日もTシャツ姿ですね。岡山県真庭市からお出でいただいた中村妃佐子さん、今日は会社のユニフォームです。野菜を生産する農業法人・株式会社 HAPPY FARM plus R の取締役でいらして、4月1日に起業したばかり。農業を始めたのは何年くらい前なんですか？

中村(妃) 4年半ですね。

林 それでもう会社を立ち上げたというのはすごい！

中村(妃) 非農家の生まれで、小さなころから手につくのも嫌いなくらいでしたが、地元の会社で農業

事業を担当していた友人からタマネギ畑の肥料まきや苗の植え付けを頼まれたので、やってみたんです。そうしたらもう、しんどくてしんどくて。でも、ふと、「こんなヒョロヒョロした苗が、どうしたらタマネギになるんだろう？」と興味が湧いてきたんです。その後も友人から「次はこの種をまいてくれ」とか言われてやっているうちに、まいた種から芽が出て、ちゃんと野菜になっていくのがすごくうれしくて、どんどん農業にのめり込んで、友人の会社にパートで入りました。

林 なるほど。一方、中村美紗さんは福岡県久留米市からお出でいただきました。観光果樹園と直売所、カフェを経営されていますが、かつてはプロのキックボクサーでいらしたという……。

中村(美) 怪我で興行運営の仕事に回った後、日本農業経営大学校に入り、卒業後に実家に就農して今年で3年目になりました。

林 美紗さんがなさっている事業は、どのようなスタイルなのですか。

中村(美) 収穫物の100%が直売に変わりました。直売所を新設しましたし、観光農園を始めて、皆さんがその場で食べたり、量り売りで持ち帰ったりというのもあります。去年カフェもオープンしたので、そこで使えるものも使って。逆に、通販は、流通コストがかなり上がってきたので減らしている段階ですね。

林 新しいビジネスを提案なさったときの、ご家族の





RINA Akimoto

秋元里奈 (あきもと・りな)

(株)ビッドガーデン(本社・東京都渋谷区)代表取締役社長。神奈川県出身。2013年、DeNA入社。16年に起業し現職に。17年、「食ベチョク」開始。事業に打ち込むため、創業時、ロゴ入りTシャツと礼服以外は捨てたという



HISAKO Nakamura

中村妃佐子 (なかむら・ひさこ)

(株)HAPPY FARM plus R(本社・岡山県真庭市)取締役。同市出身。2014年、地元の大規模環境企業の農業部門に入社。19年に起業し現職に。かつて建設会社で経理・労務管理を担当し、それが農業経営に活かしている

反応はいかがでした？

中村(美) 最初は反対されましたね。ただ、在学中に立てていた経営計画に観光農園やカフェは入っていて、4年とか5年をかけて切り換えていくはずだったのですが、ずっとあれこれシミュレーションをやっていて1年目で採算がとれるという確信があったので、無理やり押し進めました(笑)。日本農業経営大学校で学んでいたからできたことで、特に実地研修では先輩の果樹園の経営者から大きな刺激を受けましたね。

観光果樹園、野菜栽培会社、そしてオンライン青果直販

林 中村美紗さんはUターン就農でいらして、一方、中村妃佐子さんは地元で新たに農業を始められました。詳しく教えてください。

中村(妃) あたりまえの野菜をあたりまえにつくって、それを地元の岡山県内に回すという農業をやっています。今は、スーパーの産直コーナーを持っています。今は、スーパーの産直コーナーを持っています。今は、スーパーの産直コーナーを持っています。

林 最初から株式会社で始めるのは珍しいですね。

中村(妃) 株式会社という形でスタートしたのは、サラリーマン感覚で企業に勤めて農業ができるようにしたいと考えているからなんです。給料は月給で有給

(休暇)が取れて福利厚生もあって……そういう会社で働くのが私の夢でしたから、社長を説得して意見を押し通しました(笑)。そうしないと若い人がどんどん農業から離れていってしまうし、人手不足のなか、ウチの会社に入ってくれる人がいません。

林 元々パートで農業事業をお手伝いされていた地元企業から独立されたとうかがっていますが、どんなきっかけで？

中村(妃) その会社から、ちょうど1年くらい前に、独立したらと言われたんです。会社に誘ってくれた友人に報告したら「だったらオレたちでやろうよ」と言われて、思い切って独立しました。その友人が(HAPPY FARM plus Rの)社長です。元の会社からは農地や農機具を貸してもらったりなど、引き続きサポートを受けています。

林 秋元さんの食ベチョクは事業がスタートして2年ですが、どんな風にやってらっしゃるのですか。

秋元 農家さんが売る産品を登録して、それを消費者の方が買うというのが基本スキームですけど、それだけだと農家さんは登録が大変だし、消費者からすると買いづらいですね。たとえば、いくつかの種類の野菜がひとつの箱に詰め合わされた野菜ボックスのような商品の場合、時期によって中身が変わっていくので、農家さんがボックスの内容を毎回きちんと登録す



MISA Nakamura

中村美紗 (なかむら・みさ)

Fruitelier (フルトリエ) / 中村果樹園 (福岡県久留米市) 代表。同市出身。大手自動車部品メーカー勤務、プロキックボクサーなどを経て2017年に日本農業経営大学校卒、100年続く実家の果樹園の4代目に

るのは手間だし、消費者からすれば、表示が正確でないと何が届くかわからなくて不安です。

それを食べチョクでは、農家さんごとに作付け計画の段階から情報をいただいて、今、何を収穫しているのかをリアルタイムで把握しています。農家さんにいちいち登録していただくなくても、食べチョクのサービス上でお客さんに「今ならこういう野菜が届きます」と自動的に伝えられるようになっているんです。

林 起業することについて、農業のご経験もあるご両親の反応はいかがでしたか。

秋元 農業系という点は喜んでくれたんですけど、起業するという点ではびっくりしていましたね。でも、報告したときにはもう会社を辞めていたので(笑)。

夢も課題もたくさん 乗り越え、実現させるには？

林 3人ともすごい決断力ですね。皆さん、それぞれの事業について、どういった夢を持ってらっしゃるんですか。

中村(紀) 夢はたくさん、あるんです(笑)。まずはちゃんと利益をあげて会社を大きくして行って、「あの会社で働きたい」とか「農業が好き」とか「農業、楽しい」とか言ってくれる人たちをつなげていけるよ



MIKAKO Hayashi

林美香子 (はやし・みかこ)

慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科特任教授。札幌テレビ放送アナウンサーなどを経て2008年より現職。北海道大学大学院農学研究院客員教授などを歴任。近著に『農村で楽しもう』(安曇出版)

うにしたいというのが夢ですし、「農業をしていたらこんなに元気になれるよ、図太くなれるよ、こんなに楽しいよ」と、みんなに伝え続けるのも夢。都会で赤ちゃんと暮らしていた若いお母さんが、疲れて地元に戻ってきて、ウチで農業をやるようになったら元気になってくれたりしてるんですよ。それから、土地を貸してくれるおじいちゃん、おばあちゃんと一緒に農作業をしたり、障害のある方とか不登校の子とかが手伝いに来てくれたり、そういうコミュニティの場として畑を利用してみたいなのというのも夢です。

林 農業と福祉が連携する「農福連携」が今、注目されていますが、それも妃佐子さんの経営の大きな柱なんですね。

中村(美) ウチでは観光農園を始めてすぐのころ、重度の障害を持った女の子が家族で来てくれたのに、入るには大変な場所が多かったということがありました。元々カフェや直売所をバリアフリーにしようと考えていたんですが、彼女と出会ったことによって、それが一気に加速して、農園も全部バリアフリーで入れるようになりました。邪魔になる配管なんて切ればいいし、通路の幅も狭ければ広げられる。車椅子用のトイレも2つ作りました。そうしたら、今まであまり視野に入れていなかった老人ホームやデイケア施設、病院などが遠足などで利用してくれるようになっています。



フルトリエのカフェ。パフェに加えて「看板ヤギ」の小春ちゃんも人気



登録農家の顔が見える「食ベチェック」。消費者向けのレシピなども充実



HAPPY FARM plus Rではハウスと露地の双方で多品種の生産を手がける



林 これも農福連携ですね。美紗さんの夢は、どんなものですか？

中村(美) 地元では昔50軒以上あったナシ農家が15軒ほどに減って、そのうち跡取りがいるのは、ウチを含めて3軒なんです。でも、自分が観光農園をやることで今、週末だと多いときには1,000人を超える人が来てくれます。それをちょっとずつちょっとずつ、どんどんどんどん広げてって、最終的には農業版のキッザニア（職業体験テーマパーク）のような場所をつくりたいな、と思っています。一過性の観光果樹園だけじゃなく、子供たちが収穫や販売、お料理を自分でやってみて、家族と食卓を囲んで……というところまでトータルで体験できるところを実現させたいんです。

林 カフェも持っていらっしゃるから、お料理とかジャム作りとか、いろいろ体験できますよね。

秋元さんの場合、今後の夢はいかがですか。

秋元 まず、食ベチェックはJAさんと競合するんじゃないかと誤解されることも多いのですが、実際には全然違うんです。食ベチェックはJAさんが現在対応しきれていない領域に取り組んでいると考えていて、将来的にはJAさんを補完できるような存在になりたいと思っています。

私たちが目指しているのは、こだわった農家さんが正当な利益を得られる世界です。こだわった生産方法では作業を効率化しづらく、生産コストがかさみがちですが、必ずしも高く売れるわけではありません。そういう農家さんが子供には継がせられないと考えて、結果的に後継者がいなくなる現実を見ているので、こだわった農家さんが子供に継がせたいと思えるような世界をつくりたいんです。

林 つながりのある農家の皆さんの反響はどうです？

秋元 登録農家さんも300軒を超えて、これからもっと増やしていくところなんですけど、食ベチェックを利用し始めて利益が2倍ぐらいになって、これだったら

子供にも継がせてあげられるという方がいらっしやいますね。

林 農家の方が将来に夢を描けるよう、応援をされている。

秋元 農業の世界には熱い思いを持っている人がたくさんいるのに、違う業界の人からは「どうして農業なんていう地味なことやってるの？」みたいに疑問を持たれたりして、ビジネスとして成功するイメージはなかなか持ってもらえません。

中村(紀) そうそう。私もよく「なんで農業を？」と言われる！（笑）

秋元 農業の外の分野で農業に興味を持ってくれる人を増やしていかないと、農業自体がうまくいかなっていきと思います。

中村(美) イメージは大きいですね。私、作業のとき以外はスーツを着たりスポーツウェアを着たりということを意識してやっているんですけど、これからは農業全体がそうならないと絶対、新しい人たちは入ってこないですよ。

中村(紀) ウチも会社の制服をみんなで決めるとき、一番若い、今年20歳になる子は「おしゃれなのがいい。農業っぽくないやつがいい」って。それで動きやすくなくて汚れてもすぐ洗えて……と考えていって、この野球のユニフォームのようなデザインと素材を選んだんです。

秋元 農業経営の場合、成功すればするほど目立たないようにしないと、地域で辛い目に遭うこともありますよね、我慢することが美德で。でも、IT業界でも目立つことで叩かれてしまう若い起業家がありますが、そういう成功者がいるからこそ、自分もやりたいという人が後に続くじゃないですか。

中村(美) 私の知り合いの若い農家にもフェラーリに乗っている子がいるし、「億農家」（年商1億円超の農家）も何人かいます。すごくカッコいいクルマに乗っ

ているという、ただそれだけでも、わかりやすく若い子にアピールできて、憧れの的になるかもしれないですよ。

農業の「外」を見よう 出る杭になろう

林 みなさんの夢の実現に向けては課題や障害もたくさんあると思いますが……。

中村(紀) 私の場合、困っているときに相談できる窓口がはっきりしていなかったことですね。資金調達にしても、JA、信用金庫、銀行に市や県や国の助成まであって、でも、ウチが頼れるのはどこか、ウチを相手にしてくれるのはどこか、なかなかわかりません。結局、雑談のように相談していた地銀さんの担当者の方が支店長に掛け合ってくださいって融資が受けられて、やっと会社がスタートしたという状況でした。

おカネの面以外でも、頼る先は地元のJA、市役所、県庁、農政局といろいろあるんですが、ウチのようにいきなり株式会社で農業を始めるようなレアケースでは、皆さん「う～ん」と困っていらして(笑)。

ただ、私が以前から「おかやま農業女子」のメンバーだったので、そのつながりで突破口が開いて、その後は市役所にも県庁にも積極的に動いていただけで助かりました。ウチはSDGs(持続可能な開発目標)の実現に取り組んでいて、地元の真庭市がサステナビリティ分野の未来都市になっているので、その関係で市のパートナー企業になれたのも大きかったですよ。そのつながりで地元のスーパーさんに販路ができたりね。今は、どこの担当者の方も異動になりませんようにと祈っています(笑)。「おかやま農業女子」では農林中金さんの担当者の女性と知り合うことができて、いろいろ相談相手になってもらっていて、これからもっとお世話になりたいと。

林 秋元さんのところはいかがですか。

秋元 課題はいろいろありますが、まずは農家さんにとってより使いやすいサービスになるためのシステム投資でしょうか。システム投資には大きな資金が必要ですが、元々IT業界にいたこともあって、ベンチャーキャピタルなどを通じた調達しか頭にありませんでした。農林中金さんにも相談してみればよかったですよね(笑)。

もうひとつは「人材」。優秀な人材に農業分野に来てもらう、さらには私たちのような周辺事業会社に入ってもらうためにはどうしたらいいのかを考えています。今後減少を余儀なくされている農家さんをサポートするには、周辺事業者ももっと増えていくべきです。農業をより魅力的な産業にするためには、農業界の中だけではなく、積極的に外に出ていき他業界の成功事例に目を向ける必要があります。外にこそヒントがあると私は考えています。

中村(美) そう！ だから私は意識して他業種との連携をどんどん進めています。そうしないと自分の発展もないんですよ。農家の中だけでは、どうしても狭い世界になりがちで。

中村(紀) 新しいことをすると何か言われるんですよ、農業の世界では(笑)。

中村(美) しかも女性がやっていると、もっと言われちゃう。

秋元 出る杭を打つのではなく、一緒に出ていこうとしないと……。女性が先陣を切ることで見える世界もあると思います。女性というだけで良くも悪くも目立つことが多いと思いますが、おふたりのように新しい農業をされる農家さんがいらっしゃることは、私のように農業をサポートするビジネスを手がけている者として、とてもありがたいことだと思います。

林 今日は皆さんとお話しできて、本当に楽しい時間でした。日本の農業の未来は明るいと感ずることができて、すごく嬉しく思いました。ありがとうございました。



座談会の終了後、会場の日本農業経営大学校で出席者と学生の懇談会も行われ、現在と未来の農業ビジネス経営者の中で熱いQ&Aが交わされた

